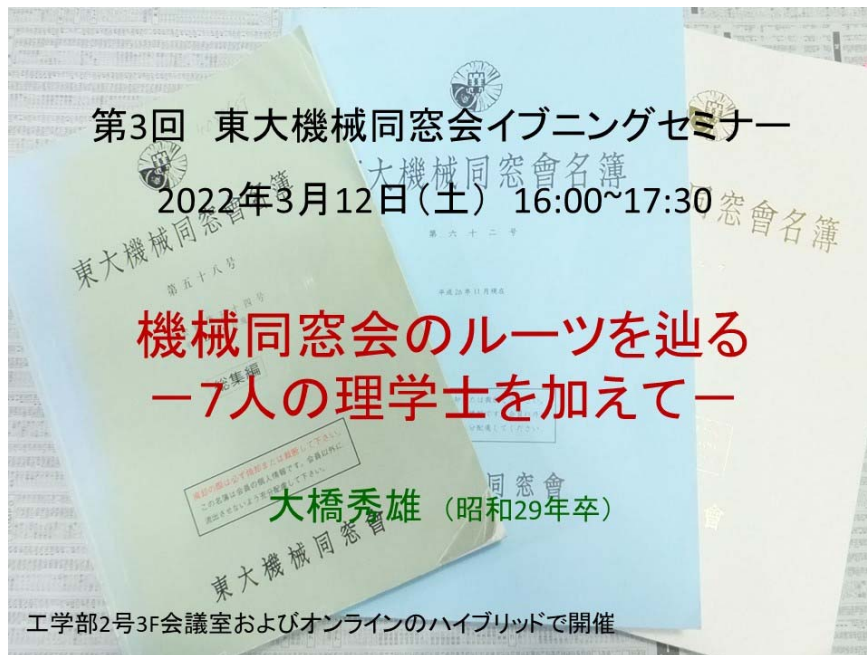




講演記録

(講演に使ったパワーポイントに説明を加え、講演をフォローできるように編集した記録です)

はじめに

昭和29年卒の大橋秀雄でございます。卒業以来68年、職場としての母校を定年で去ってから30年の歳月が流れ、私もとうとう卒寿を越えました。今日このような形で皆さまにお目にかかり、お話しする機会を頂いたことを大変嬉しく思っています。ハイブリッド方式で講師を務めるなど、初めての経験です。うまくやれるか心配ですが、サポートもしっかりしているので、チャレンジしてみます。ヘマがあっても、どうぞお許してください。

(自己紹介省略)

今日のセミナーは、先輩も参加していっしょやる中で失礼ですが、久し振りに教壇に立ったような気分でお話しさせていただきます。難しい話は何もありませんから、どうぞリラックスしてお聞きください。

私は東大定年後、新宿にある工学院大学の教授として第二のお勤めを始めました。数年でそこも定年になる予定でしたが、学長を9年、理事長を8年務める羽目になり、フルタイムの職を辞してフリーの身になったのは80歳直前でした。それまでに、暇ができたなら調べてみようと思った宿題が幾つも溜まっていたのですが、その中の一つが今日の話に直結します。

5人の第一回卒業生

機械同窓会名簿を見ると、学部卒業生の筆頭に、明治12年に工部大学校機械科を卒業した5人の先輩の名前が並んでいます。我々の元祖のような方ですが、知っていた名前は三好晋六郎の一人だけでした。この方は日本の造船学を築いた方で、工学部キャンパスにある船舶試験水槽の本館入り口に胸像が建っています。目にした方も多いはずです。5人はいったいどんな生涯を送ったのか、同窓会名簿を見るたびに気になり、何時か調べようと思っていましたが、それに着手できたのは、暇になった翌年のことでした。

3ヶ月ほど、東大図書館、国会図書館などに
通い詰め、また国立公文書館のデジタルアー
カイブから辞令などの古い文書を探すことに
没頭しました。5人の略歴を纏めた一文は、当
時の三浦宏文同窓会長のお勧めで同窓会名
簿に付録として載ることになりました。右のス
ライドをご覧ください。

平成24年版の同窓会名簿第60号に「東大
機械同窓会第一回卒業生 - 5人の足跡を辿
る-」という表題で載せていただきました。最初
のページの冒頭だけお見せしています。この

記事は、機械同窓会のサイトにアップしてありますから、興味がおありでしたら、ログインして見るか、或いはダウンロ
ードして読むことができます。(http://todaikikai.jp/member/pdf/kaiho_60.pdf)

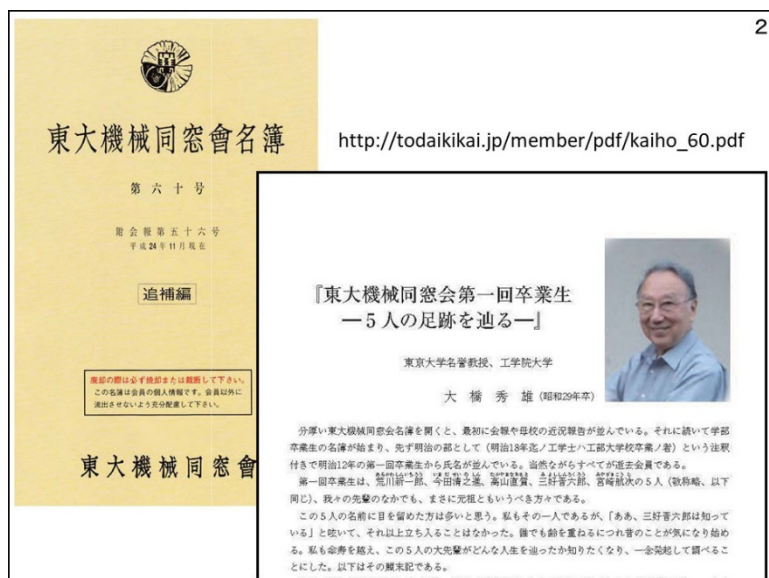
問題の5人の名前は右のスライドの通りで
す。(以降、明治の先輩は歴史的人物として
敬称を略します) 写真は当時超貴重品で、探
すのに苦労しました。やっと見付けたのは工
部大学校の卒業記念写真だけで、そこから切
り抜いたものを使っています。

サインは、英文の卒業エッセイに載ってい
たもののコピーで、全員のエッセイが2号館
の機械図書室に保管されています。手にとっ
て見ると、みな流れるような達筆で書かれて
います。

工部大学校は、イギリスから弱冠25歳のヘンリーダイアーを招き、理論と実践を組み合わせた理想的な工学教育を
実現するために創立されました。教育は完全にイギリス式で、特色の一つが成績至上主義でした。卒業も一等と二等
に別れ、一等にだけ工学士の学位が与えられました。英文では、Master of Engineering となっています。一等は全体の
1/3ほどでした。

イギリス留学と書いてある荒川、高山、三好が一等でした。機械科では5人中3人が一等ですから、優秀な人材が
集まったことが分かります。その3人は、それぞれに専門分野が割り当てられ、卒業後直ちに3年間のイギリス留学
に赴きました。専門は、荒川は紡織学、高山は機械学、三好は造船学でした。

二等組は、卒業後直ちに工部省から任地が指定され、工部8等技手の底辺からたたきあげて頭角を現してゆきまし
た。今田は、陸軍大阪砲兵工廠で大砲作りの先頭に立ちました。記録的な巨砲を次々に作って、それが日清、日露の
戦争で大きな戦力となりました。宮崎は鉄道畑を歩み、蒸気機関車製造の主のような存在でした。最後は鉄道技術職
のトップである技監に登りつめました。



5人の中で今田が最も長命で、85歳で亡くなりました。最も短命だったのは高山で、31歳で亡くなりました。高山は、卒業成績は機械科トップ、第一回卒業生23人の中でも二番でした。もし長生きしたら、機械工学科の初代教授になったはずで。全体でトップだった志田林三郎は、小さい頃から神童と呼ばれ、とくに数学の才に優れた飛び抜けた秀才でした。電気学会を創設するなど、電気分野のパイオニアです。彼も36歳の若さで亡くなってしまいました。天は二物を与えず、といいますが、まさにその通りですね。

こんな話をしていると、それだけで時間切れになりますから止めます。調べ始めると止まらなくなるほど、それぞれにドラマがありました。私にもし文才があったら、司馬遼太郎の「坂の上の雲」に倣って、その工業版で明治の青年像を描きたいと思ったほどでした。書けたのは略歴だけでしたが、同窓会名簿に発表も終わって、最初の宿題に目処がつかしました。しかし、関連してすぐ新しい疑問が生まれてきました。

東大機械同窓会名簿 第1号：昭和28年版 から 第61号：平成25年版 までの記述 ↓ 帝国大学工科大学 機械工学科	4 学部卒業生 明治の部 (明治18年迄ノ工学士ハ工部大学校卒業ノ者) (逝去会員) 明治12年卒業 荒川 新一郎 今田 清之進 高山 直賀 三好 晋六郎 宮崎 航次 明治13年卒業 家入 安 岡 実康 佐立 次郎 坂 満 竹田 関太郎 野上 由貞 早田 喜勉 原田 虎三 藤田 重道 安永 義章 吉見 九郎 明治14年卒業 栗屋 新三郎 白井 藤一郎 黄志 泰 子安 雅 須田 利信 田中 林太郎 内藤 政共 服部 俊一 真野 文二 明治15年卒業 井口 在屋 川井 清三郎 栗塚 又郎 香坂 李太郎 斎藤 恒三 中原 淳蔵 明治16年卒業 稲垣 銓平 岩崎 彦松 大竹 多気 近藤 基樹 水上 彦太郎 明治18年卒業 菊地 恭三 進 軽太 畑 精吉郎 明治19年卒業 【元工部大学校学生】 瀧 美貞幹 宇都宮 貫一 【元工芸部学生】 鈴木 千代吉 大平 松二郎 佐文利 隆 下山 秀
--	---

「工芸学部」って、なに？

機械同窓会名簿は、昭和28年に第1号が発刊され、それ以来平成25年の第61号まで、その冒頭はずっと上のスライドに示すような記述になっていました。

先ず明治の部から始まり、(明治18年までの工学士は、工部大学校卒業の者)という注釈付きで、明治12年から18年までの卒業生、合計39人が年ごとに並んでいます。

この中で、一等で卒業して工学士の学位を貰ったのは半分近い17人でした。しかし、帝国大学が始まると学位令が変わり、学位は博士だけで、学士は称号に変わりました。Degreeからtitleへの変更です。この折に、二等で卒業された方に、おくらて工学士の称号が与えられました。結果的には、卒業生は全員工学士になりました。ここまでは問題ありません。

問題は、帝国大学に変わり、工科大学機械工学科卒の最初の卒業生となった明治19年卒の6人の記述です。

[元工部大学校学生]と注釈が付いた二人は、工部大学校が工科大学に合併されたから当然です。しかし[元工芸部学生]と注釈が付いた四人は、いったい何者なのか？ このような注釈は、その後の卒業生には全く見当たりません。なお、工芸部は工芸学部のみスプリだったことがすぐ分かったので、以降工芸学部とします

工芸学部の正体を明かすのが、私の次の宿題になりました。これを明かすためには、帝国大学が誕生するまでの合併の詳細を知る必要があります。調査にだいぶ時間がかかりましたが、その結果を取りまとめてご説明します。

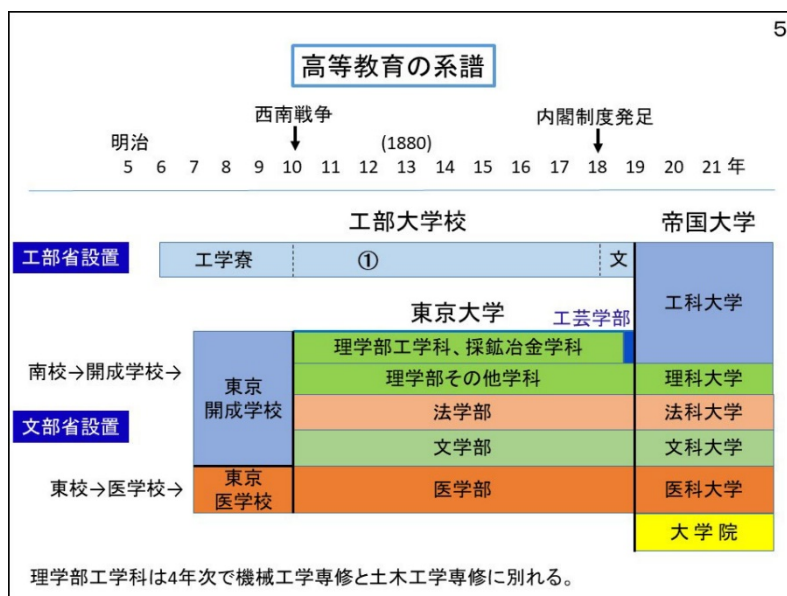
右のスライドに、高等教育の系譜と題して明治の前半における教育の変遷が纏められています。話は、明治のごく初期に遡ります。明治になると驚くようなピッチで近代化が始まりました。かつて武士の子弟が学んだ全国各地の藩校は消えてなくなり、それに替わる塾や学寮が続々と東京に誕生しました。そのため士族の秀才たちが全国から東京に集まってきました。福沢諭吉が維新の10年前に始めた蘭学塾は、明治と共に慶應義塾と名前を変えましたが、慶応以外にも早稲田、明治、法政、

中央などの私立大学のルーツが、この頃から存在していました。しかし、理学、工学の分野では、工部省所管の工部大学校と文部省所管の学校が中心になりました。

工部省は、明治6年に工学寮を設置しましたが、明治10年に工部大学校と改名し、明治12年に第一回卒業生を送り出しました。それ以降計39人の卒業生を輩出してから工科大学に合併したことは、すでにお話したとおりです。合併直前に「文」と書いてあるのは、このときから、文部省所管になったことを示しています。明治18年の内閣制度発足と同時に、工部省は廃部となり、農商務省と逓信省に事業が引き継がれましたが、工部大学校だけが、文部省に引き取られました。

一方文部省関係では、明治と共に多くの学校が生まれては消え、追跡困難なほどです。ここでは、あとまで残ったメインストリームだけが示されています。医学系は、東校＞医学校を経て東京医学校になりました。その他は、南校＞開成学校を経て東京開成学校になりました。この時点で、二つの学校に収束したことになります。明治10年、西南戦争の年ですが、ここが東京大学の誕生年となりました。二つを合わせて、4学部からなる総合大学として東京大学が成立しました。スライドのように、下から医学部、文学部、法学部、理学部になります。これらは、やがて誕生する帝国大学に分科大学として移行しますが、理学部だけは工科大学と理科大学に別れて移行することになりました。そのため、理学部を2段に分け、上に工学に近い学科を、下に数学、物理、化学など伝統的な理学部の学科をその他として入れています。

上段には、工学科と採鉱冶金学科が入ります。工学科は、下の注釈にあるように、最終学年で機械工学専修と土木工学専修に別れました。しかしあとで説明するように、当時は学科が組織名と分類名の両方に使われていたので、機械工学科と土木工学科があったと考えてもいいでしょう。



しかし、また新しい疑問が生まれました。工科大学に合流する前に理学部機械工学科を卒業した方がいるはずです。その方々が、なぜ機械同窓会から漏れてしまったのか？ それを知るための探索がまた始まりました。その探索に入る前に、このスライドに關係する補足を二三お話しさせていただきます。

さきほど機械工学専修が機械工学科と
呼ばれていたと説明しましたが、その実例
を右のスライドでお見せします。

東京大学法理文三学部一覽(明治15年)より抜粋

就職先名簿

五三二

英國留學

土木工学科

石黒五十二

石川

英國留學

吉田・朋吉

大坂

印刷局

坂田貞一

東京

機械工学科

東京大学理学部教授

石川千代松

静岡

農商務省東京大学理学部教授

佐々木忠次郎

石川

農商務省

堀川友太郎

青森

生物学科

飯綱勉

静岡

在籍学生名簿

九一二

山崎桂次郎
第三年級

柳岡

工学科

大屋雅平
第四年級

山口

野口嘉夜

東京

土木工学科

宮城

阪田太郎

石川

横井佐久
第四年級

福井

田邊三男

鳥根

機械工学科

5

にしました。

理工の対等合併といっても、文部省すなわち理学部側が主導権を握っていたようです。工科大学発足時の機械工学科の教官人事を見ても、教授は全員文部省系の方でした。工部大学校は、このときは押され気味でした。

次のお話は、私が調べたのではなく、講談社学術文庫にある 寺崎昌男著 東京大学の歴史 という本を読んで知ったことです。

明治 18 年に内閣制度が始まり、伊藤博文を総理大臣とする我が国初の内閣が誕生しました。内外で問題が山積するなか、その翌年に急いで帝国大学を作ったのには、何か余ほどの事情があったに違いありません。新内閣の最大の課題は、大日本帝国憲法の公布でした。そのためには、法科の重鎮たちの賛同を得て、国論を誘導して貰う必要がありました。政府の意に沿った最高学府を作り、その支援の元に新憲法の公布を確実なものとする。急いで作りたかったのは法科大学だけでした。法学部としないで、大学の下に大学を作るまでして法科大学と名付けたのは、よほど権威付けが欲しかったのでしょう。そこに他の4分科大学を加えて総合大学としての帝国大学が生まれました。

帝国大学令によると、法科大学の学長を総長が兼任すると決められていました。初代総長には、東京大学総理の加藤弘之が就任すると思われていましたが、政府は、東京府知事をしていた渡辺洪基を指名しました。まさに政治任命そのものです。学者たちの中に大ブーイングが起こりました。政府は学者としての加藤は認めても、法科の重鎮をまとめる統率力に不安を覚えていたようです。そこで政府の信任が篤かった渡辺洪基を指名しました。渡辺は初代総長と法科大学学長を4年務め、大日本帝国憲法の公布を待って辞任して加藤弘之に替わりました。総長が法科大学学長を兼ねる制度もやがて消えました。東大にいたとき、法学部がいつも筆頭に来るのは何故かと思っていましたが、法科が最初から特別扱いだったことを知って、分かった気もしました。

渡辺洪基のことをご存知の方は、極めて少ないと思います。でも私にとっては、特別に大切な方でした。それは、私の第二の勤め先、工学院大学のルーツに当たる 工手学校 を設立した方だからです。渡辺は、工学士の教育態勢はこれで整った、しかし工業の発展のためには、工学士の下で働く工手の教育が必要だと痛感し、総長就任の翌年に自ら理事長になって工手学校を作ってしまいました。明治の人の実行力には、舌を巻くばかりです。

7 人の理学士

ここから元に戻って、理学部機械工学科卒業の先輩が、なぜ機械同窓会に加わらなかったのか、その理由を知るための探索を始めます。まず、理学部における教育を具体的に見てみましょう。右のスライドをご覧ください。

理工二つのルーツを比較しています。工部大学校については、すでに多く語ってきたので、理学部側を主に見てゆきます。

理学部機械工学科では最初の3年で共通

理工二つのルーツ

- 工部大学校機械科 予科2年、専門科2年、実地2年、計6学年
卒業Essay(英文)
卒業は一～二等に別れ、一等にのみ 工学士授与
初任給 月額 一等30円、二等25円
- 東京大学理学部機械工学科 共通基礎3年、専修1年、計4学年
共通基礎: 数学、物理、化学、力学、天文学、地質学、
金属冶金学、物質強弱学、機械論、蒸動学及蒸気機関、
道路及鉄道の測量と構造、陸地測量、
図学、論理学、英語、独語
機械工学専修: 機械計画製図実験、材料試験、機械所実験、
卒業論文(邦文、漢文、or英文)
卒業生に 理学士授与
初任給 月額50円が相場
専門教育は、主として外国人教師による。

基礎を学び、4年に入って専修科目を学びます。その科目はスライドをご覧ください。最後の卒論は、3ヶ国語を選べるくらいですから、相当力が入っていたのでしょう。専門教育の先生は、工部大学校ではほぼ全員、理学部では約半分が外国人教師でした。

これを見ると、二つとも当時としては最高の機械工学教育だったと思います。大きな違いは学位の名前だけです。もし単に理学士であるだけで、工学士が主流の機械同窓会から排除されたとすれば、それは余りにも形式論で、改める必要があると痛感しました。

実は、これまで出てこない大きな違いがありました。それは初任給のことです。東京大学理学部卒業生の初任給は、月額 50 円が相場とされてきました。軍人の将校の最下位、少尉の月給も 50 円でしたから、50 円でスタートするのは妥当なところだったのでしょう。

ところが工部大学校卒業生は、卒業後直ちに工部省関係の仕事に就き、その初任給は、一等で 30 円、二等で 25 円と決められていました。そもそも工業士官を育成すると謳って始めた学校ですが、卒業して士官になっても、その月給が少尉の月給 50 円よりずっと低く、下士官並みだったので、学生の不満が出るのも当然だったでしょう。

そこで学生の代表が、当時工部省の大臣を務めていた山尾庸三に増額の陳情に行きました。大臣の答えは「**若年の卒業生に金を沢山与えるは有害無益なり**」と素っ気ないもので、ガンとして撥ねつけました。

山尾庸三は、工業を興すには先ず教育から始める必要があると、自ら主張して工部大学校の設立を実現した張本人です。山尾はたいへんストイックな人物で、自らを律するだけでなく、他人にもそれを求める嫌いがありました。山尾がこのとき「**報酬は能力の証である**」といって陳情を認めてくださったら、技術を下に見る世間の風潮を断ち切って、我々を含め後々の工学部卒業生が大きな恩恵を受けたことに間違いありません。山尾は後々工学の父と呼ばれるようになりましたが、もしあのとき報酬アップを認めていたら、工学の父を越えて工学の守り神、守護神と呼ばれるようになったかもしれません。

ここで、我々の理工二つのルーツの卒業生の名前を、具体的に見てゆきます。下のスライドをご覧ください。

9

工部大学校および東京大学理学部 機械系卒業名簿

明治 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23年

帝国大学（3学年）

工部大学校 機械科（6学年）

工芸学部

工科大学 機械工学科

東京大学理学部 機械工学科（4学年）

工部大学校

荒川新一 家入 安 栗谷新三 井口在屋 稲垣銓平
 今田清之 岡実泰 白井藤一 川井清三 岩崎松彦
 高山直實 佐立次郎 貴志 泰 栗塚又郎 大竹多気
 三好吾六 坂 湛 子安 雅 香坂李太 近藤基樹
 宮崎航次 竹田関太 須田利信 斎藤恒三 水上彦太
 野上由貞 田中林太 中原淳蔵
 早田貴勉 内藤政共
 原田虎三 服部俊一
 藤田重道 真野文二
 安永義章
 吉見九郎

計 39人

太字は、旧教官

菊地恭三
 進 經太
 畑精吉郎

渥美貞幹*
 宇都宮貴*

朝永正三 高辻奈良
 高井助太

* 元学生の注釈付き

以降
 工科大学
 入学生

東京大学理学部

阪田貞一 吉田朋吉
 九里龍作

横井佐久 権田正三
 川上新太
 田邊三男

鈴木千代* 広田理太
 大平松二*
 佐分利隆*
 下山 秀*

大久保忠

7人の理学士

6人の元工芸学部学生、工学士

6年制の工科大学、4年制の理学部が、3年制の工科大学に移行します。

黒字で書いたのが工部大学校機械科に入学して卒業した学生名です。明治12年に第一回の5人の卒業生を出し、以降合併までに計39人の卒業生を出したことは、すでにお話ししました。それまでに卒業できなかった学生は、工科大学機械工学科で卒業します。工科大学始まりの年、明治19年に卒業した2名には[元工部大学校学生]の注釈が付きました。その後卒業した3名には、注釈が付いていません。恐らく、初年度卒業生は、実質的に大部分の課程を終えてから移行したので、この年度に限り注釈を付けたものと思われます。明治23年以降は、工科大学に入学したものですから、卒業生は一本になりました。太字で書いた高山、三好、真野文二、井口在屋の4人は、工科大学で教授、助教授を務めました。

理学部機械工学科に入学した学生は、赤字で書かれています。工部大学校に1年遅れて最初の卒業生、阪田貞一を送り出しました。以降合併までに計7人の理学士を誕生させています。学生のまま残った6人は、形式的に工芸学部学生を経て、工科大学で卒業しました。初年度卒業生だけに注釈が付いたのは、工部大学校の場合と同じです。この6人は、理学士になるつもりで入学したのに、工学士になっちゃたという面白い経験をしています。太字で書いた阪田と九里龍作が、工科大学で教授または助教授を務めました。

黒線で囲まれた名前は、機械同窓会名簿に最初から載っていました。しかし、赤線で囲まれた7人の理学士、理学部機械工学科卒業生が、名簿からまるまる欠落していました。

7人の理学士は、どんな方？

私は、ひょっとすると、この方々は理学部で特殊な教育を受け、機械とは無関係な分野で活躍したから無視されたのかも知れないと疑って、その代表として最初の卒業生、阪田貞一を選んで経歴を調べてみました。

右のスライドに纏めてあります。安政4年生まれ
の士族でした。大正の半ばまで、戸籍に族籍と称して身分を記載することが求められました。平民が93%と大部分ですが、5~6%の士族とごく少数の華族や神職などの宗教関係者に分けられました。私が調べた卒業生は、一人を除き全員士族の出でした。明治の工業の発展は、サムライ達によって支えられたといって過言ではありません。工業発展を通じて列強の仲間入りを果たしたいという愛国心が、格段に強かったのでしょう。

安政4年(1857)生まれ、東京府士族 東京大学理学部機械工学科を卒業後 印刷局技師、工科大学助教授(機械工学科、1日在任)、 東京職工学校教諭を経て、東京工業学校校長、 東京高等工業学校校長を歴任 機械学会第3,15,18,20,23期会長を務める。 享年63
--

阪田は、印刷局の技師を経て工科大学助教授に就任し、機械の旧教官の仲間入りをしました。しかし何故か一日で退職し、東京職工学校教諭になりました。この学校は、文部省が力を入れていた技術中等学校ですが、名前のせいで学生が集まらず苦勞していました。帝国大学発足後の2年間は、附属学校となって大学のテコ入れを受けていました。そこに転出し、東京工業学校、東京高等工業学校と名前が変わるごとに校長を務めました。この学校は、昭和の初めに東京工業大学に変わります。東工大の歴史を見ると、その礎を築いた人として必ず阪田の名前が出て来ます。さらに、機械学会の第三代会長を務め、合計5期にわたって会長を務めています。井口在屋と並んで、最多数の再任でした。63歳で亡くなりました。このように、阪田は、機械の分野でトップリーダーだったばかりでなく、我々の旧教官の

お一人だったことがはっきりしました。

ここで、私が行った調査の一例として、阪田のたった一日の工科大学助教授の任用を見付けるために、何を調べたかお見せします。阪田の任用が余りにも不自然だったので、官報に載っている人事記録を調べてみました。

官報は、国会図書館デジタルコレクションに収録されているので、検索して探すことができます。出て来た人事記録を右のスライドに示します。

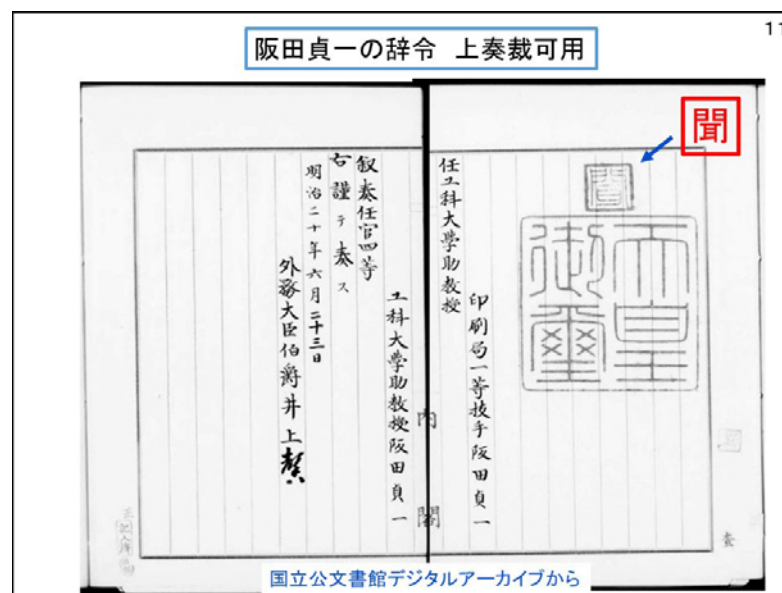
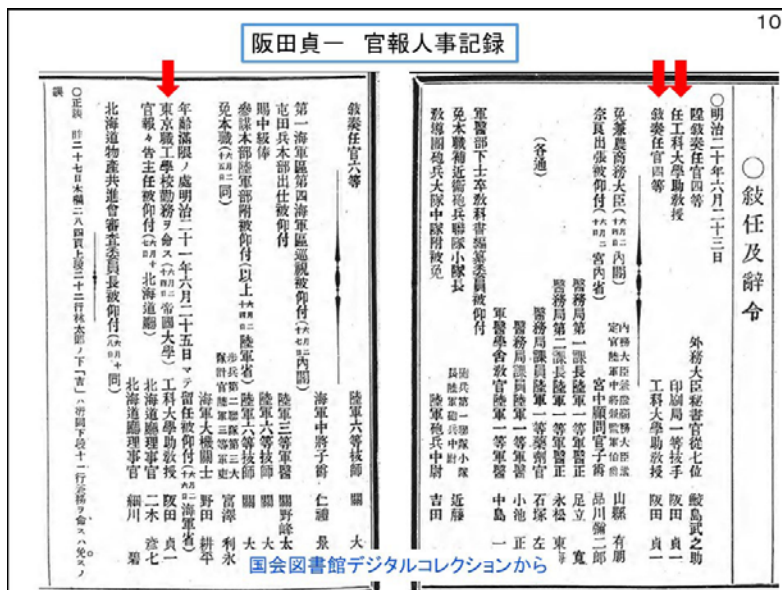
右半分に明治 20 年 6 月 23 日付の辞令が載っています。赤い矢印の下にあります。阪田が工科大学助教授に任ぜられ、同時に奏任官 4 等に叙せられたことが分かります。左半分は翌号の官報ですが、阪田に東京職工学校勤務を命ずという辞令が、翌日 24 日付けで出ています。付属学校ですから、転勤命令のようです。でも、阪田の助教授を免ずという辞令はどこを探しても出て来ませんから、これが実質的な辞任だったようです。

人事を探す手段として、国立公文書館のデジタルアーカイブに保存されている辞令の原本を見る方法があります。阪田関係はたくさん出て来ますが、助教授任用については、文部大臣から総理大臣への任用上申書、総理大臣の任命書、さらに総理大臣から天皇への上奏書が見付かります。最後の上奏書だけを右のスライドでお見せします。

本来は内閣総理大臣伊藤博文が天皇に謹んで奏す、上奏するはずですが、出張中だったのか、外務大臣井上馨が替わって上奏しています。本来は書記が書く名前の下

に職印が押されるはずですが、井上は名前だけを自書しています。上奏の中身は阪田の任用と叙任のことで、中央に書いてあります。右側が天皇からのお返事です。天皇御璽の大きな朱印が押され、その上に「聞」の字を囲った角印が押されています。これが上聞に達した、聞き届けたという裁可の証です。奏任官の上の勅任官になると、上奏手続きは不要になり、直接裁可されるので「聞」の角印がなくなります。大臣、大使などの親任官の辞令には、天皇が御璽の上に諱(睦彦)を墨書きされます。

阪田が一日の任用に御璽までいただいた明治という時代の格式の高さと、すべてが筆書きだった公文書の美しさに、改めてびっくりしました。



調査のまとめと成果

以上で、当時の状況はほぼ解明され、7人の素性も分かりました。これを纏めた記事を、「同窓会名簿に載っていないー東大機械工学科卒の7人の理学士」と題して、同窓会名簿の第61号に掲載して頂きました。この記事も、機械同窓会のサイトにアップされています。興味があったらご覧ください。(http://todaikikai.jp/member/pdf/kaiho_61.pdf)

この調査のまとめと提案を、上のスライドに示します。このように、7人の理学士を先輩に加えることを提案しましたが、三浦前同窓会長の後をうけた松本洋一郎現同窓会長や幹事の方々は、この提案に同意してくださり、同窓会名簿の第62号から改訂を実行してくださいました。第1号以来60年ぶりの改訂です。最新版では、名簿冒頭の表現が下の二つのスライドのように変わりました。

左の最初のページは工部大学校卒業生の記述で、基本的に変わっていません。ただし黒枠内に工部大学校から工科大学への合併の歴史が書かれています。右の2ページ目が最大の変化です。東京大学理学部工学科機械工学専修の卒業生、7人の理学士が年度ごとに加わりました。黒枠内に東京開成学校以来の変遷の歴史が詳細に記されています。その下の帝国大学工科大学機械工学科卒業生の記述は、以前と変わりありません。これで目的達成です。

調査のまとめと提案

東大機械の歴史を振り返ると、東京大学理学部は、工部大学校と同様に正統なルーツである。現に、僅か3ヶ月形式的に在籍した工芸学部生が、われわれの先輩に加わっている。それなら、実質的に何も変わらない理学部機械工学科卒業生も、われわれの先輩に違いない。

機械同窓会名簿の筆頭に、工部大学校卒の工学士と同列に、東京大学理学部卒の7人の理学士を加える。その方が、歴史により忠実である。そして、折角恵まれた二本のルーツを、しっかり伝えることができる。

(明治12年-1884)

氏名	勤務先	自宅連絡先・メールアドレス	大学院
明治6年工部省に工学家が設置され、同10年工部大学校と改称、同12年最初の卒業生を出す。明治19年、帝国大学工科大学に合併される。			
工部大学校機械科			
明治12(1879)年卒業			
〈逝去〉	荒川新一郎	今田清之進	高山直實
		宮崎航次	三好晋六郎
明治13(1880)年卒業			
〈逝去〉	家入安	岡東康	坂道
	早田喜勉	原田虎三	藤田重道
		佐立次郎	安永義章
		竹田蘭太郎	吉見九郎
		野上由貞	
明治14(1881)年卒業			
〈逝去〉	藤田新三郎	白井藤一郎	貴志泰
	内藤政共	服部俊一	真野文二
		子安種	園田利信
		田中林太郎	
明治15(1882)年卒業			
〈逝去〉	井口在壁	川井清三郎	藤澤文郎
		香坂幸太郎	斎藤恒三
		中原淳蔵	
明治16(1883)年卒業			
〈逝去〉	稲垣隆平	岩崎彦松	大竹多気
		近藤基樹	水上彦太郎
明治18(1885)年卒業			
〈逝去〉	菊地徳三	進經太	畑精吉郎

(明治13年-19年)

氏名	勤務先	自宅連絡先・メールアドレス	大学院
明治10年文部省所管の東京開成学校と東京医学校が合併して東京大学(法政文医学部)が発足、理学部工学科に土木工学と機械工学専修が設けられる。なお工学科機械工学専修卒業生は、帝国大学一覧など古い文書では、理学部機械工学科卒として記載されている。同18年理学部工学科を始めとする工学系学科が新設された工芸学部に移管され、明治19年発足の帝国大学工科大学に合併される。			
東京大学理学部工学科機械工学専修			
明治13(1880)年卒業 理学部工学科機械工学専修			
〈逝去〉	阪田貞一		
明治14(1881)年卒業 理学部工学科機械工学専修			
〈逝去〉	五代龍作(九郎)	吉田新吉	
明治15(1882)年卒業 理学部工学科機械工学専修			
〈逝去〉	川上新太郎	田邊三男	横井佐九郎
明治16(1883)年卒業 理学部工学科機械工学専修			
〈逝去〉	横田正三郎		
7人の理学士加わる			
明治19年3月 帝国大学が発足し、法政工文理の五つの分科大学が設置される。工部大学校機械科と東京大学工芸学部機械工学科が合併して工科大学機械工学科を編成する。			
帝国大学工科大学機械工学科			
明治19(1886)年卒業 元工芸部学生			
〈逝去〉	大平松二郎	佐文利隆	下山秀
		鈴木千代吉	
明治19(1886)年卒業 元工部大学校学生			
〈逝去〉	藤美貞幹	宇都宮實一	

これまでの経緯を、お陰様で と題して
右のスライドに纏めました。お読みくださ
い。

これで一件落ち着いたようですが、私には
まだ割り切れないものが残っていました。
何故 7 人の理学士が同窓会名簿から脱落
したのか、意図的だったのか、或いは単な
る失念だったのか。それを知る手掛かりは
全く得られませんでした。疑問はまだ完全
に解けてはいません。また探索が始まりま
した。

お陰様で

- 機械同窓会名簿に、理工二つのルーツの先輩たちを正確に記載することができました。
- 東大工学部には、外にも土木同窓会、化学・生命系親和会、鉱山・冶金系同窓会のように、理工合体の歴史を共有する同窓会があります。これらの同窓会は、最初から理学部卒の理学士を会員として名簿に載せていました。機械同窓会も、これに加わりました。
- 同窓会名簿の変更を後押しし、それを実行してくださった三浦宏文前会長、松本洋一郎現会長をはじめとする同窓会幹事の方々に感謝します。
- 調査に当たり、工学部2号館機械図書室の滝沢正順さんから資料の発掘を始め多大な協力を頂き感謝します。

16

脱落の原因は？

私はその一因が、工科大学移行時の教官人事にあったのではないかと先ず疑ってみました。移行前後の人事の動きを調べた結果が、下のスライドに纏められています。

17

工科大学移行に伴う機械工学科教官人事

西暦	1890	1891	1892	1893	1894	1895	1896	1897	1898	1899	1900	1901	1902
明治	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
							帝国大学発足						
山田要吉	南、留					東京職工学校教諭	教授	東京職工学校へ					
谷口直貞	東開、留	東京職工学校教諭					教授	農商務省と兼任で在任1月					
九里龍作	理M14、留					東理講師	教授	半年で退官、半田銀山自営					
阪田貞一	理M13					印刷局一等技手から	助教授	在任1日で東京職工学校へ					
高山直質	工M12、留					工部助教授	教授就任直前に逝去、没後教授として扱われる。						
真野文二	工M14					工部大学校助教授	助教授(イギリス留学)	教授					
井口在屋	工M15					工部大学校助教授	助教授	M29教授					
CD West						工部大学校 外国人教師	工科大学 外国人教師						M41/1まで
H Dyer	工部大学校 教頭							帝国大学総長:渡辺洪基、工科大学長:古市公威					
東京職工学校:明治14年設立の国立技術中等学校、東京工業大学のルーツ													

帝国大学工科大学発足と同時に教授に就任したのは、文部省或いは理学部系の山田要吉、谷口直貞、九里龍作の3人でした。山田は南校から留学し、帰国後東京職工学校の教諭を務めました。教授に就任して2年も経たないうちに、また職工学校に戻っています。谷口は、東京開成学校から留学し、帰国後すぐ創立されたばかりの職工学校の教諭になりました。農商務省と兼務で教授に就任しましたが、在任はひと月の短かさでした。阪田の1年後輩の九里は、卒業後直ちに留学し、帰国後理学部講師を務めていました。その九里も、教授になった半年後に辞職を申し出て、経営者

に転身しました。辞職後直ちに大阪の五代財閥の養子となり、姓を五代と変えて銀山経営など実業界で活躍しました。昨年大河ドラマ「青天を衝け」の中で、渋沢栄一の盟友として五代友厚がたびたび登場しましたが、その娘婿になったわけです。技術より経営の方が、ウマが合ったのでしょう。

これで2年足らずで3人ともいなくなりました。1年遅れて助教授として着任した阪田も、一日で転出です。文部省・理学部サイドは、人事はここで途絶えました。

一方工部大学側では、母校で助教授を務めていた高山、真野、井口の3人が移行しました。高山だけが留学を終えていたので、助教授就任は遅れましたが、工科大学教授として発令される予定でした。短命だったという話はすでにしましたが、3月1日工科大学発足、同7日高山歿という悲運でした。発令をずいぶん探しましたが、見付かりません。教授達の発令が3月末でしたので、間に合わなかったのです。でも高山は、経歴の中では工科大学教授として遇されています。真野は助教授として工科大学に移行しましたが、直ちに3年間のイギリス留学に赴き不在で、帰国後教授に就任しました。機械の初代教授です。唯一人残った井口は、孤軍奮闘を続けました。留学のタイミングが遅れ、教授就任は明治29年になりましたが、機械の第二代教授になりました。当時の人事をみると、留学が教授就任の前提だったように思えます。

ここで特筆すべきは Charles Dickinson West, ウェスト先生 の存在です。ダイアーと交代するために来日したウェスト先生は、工部大学で4年、工科大学で22年、計26年にわたって、一貫して外国人教師として機械工学教育の心柱の役割を果たされました。工部大学から工科大学に着実に人事が引き継がれたのは、ウェスト先生の存在が大きかったと想像されます。工学部1号館前の広場に、ウェスト先生の胸像が置かれています。今なお、我々を見守って下さる感じがします。

右のスライドをご覧ください。

機械系会議室に掲げられている歴代教授の写真です。新しい写真は年々加わりますが、古い部分は、昔から何も変わっていません。

真野、井口と工部大学校卒の二人の教授が並び、そのあとに、工科大学卒の斯波、加茂、田中、内丸が続いています。

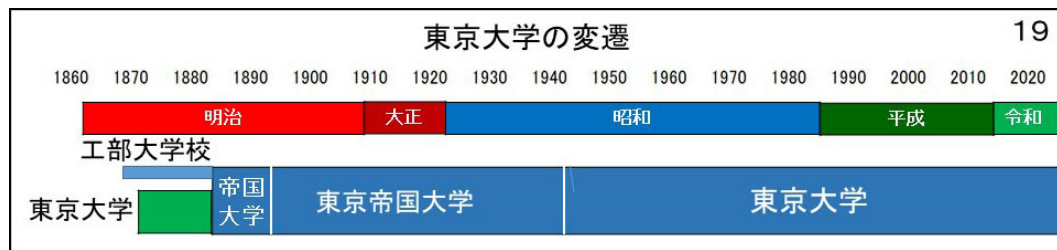
ここに理学部の痕跡はどこにもありません。工科大学発足から同窓会名簿1号が出る昭和27年までに70年近い歳月が流れました。この間に、人脈が途切れてしまった理

学部 のルーツが次第に忘れ去られてしまったことは、容易に想像できます。失念というよりも、歴史の長い空白の中に溶け込んでしまったのでしょう。これが7人の理学士が脱落した理由だと、私は推論しています。

東大全史

これで、表題の話はすべて終わりました。まだ少し時間が残ったので、古い話だけでなく、145年にわたる東京大学の歴史の中で起こった主要な出来事を振り返ってみます。





ときは 明治、大正、昭和、平成、令和と移り変わりました。私は 1931 年生まれ、東大全史の半分以上を生きたことに感無量です。もし工科大学の合併劇が失敗だったら、一本のストレートな歴史になったことでしょう。以下に主要な出来事を年ごとに記載します。

明治 19: 東京大学と工部大学校を合併して帝国大学を置く。大学院と 5 分科大学で構成する。

明治 23: 農科大学を加える。

明治 26: 講座制の導入。機械工学科に機械工学第一、第二講座、3 年遅れて第三講座設置。

機械第三講座(水力学及び水力機械)は、初代は井口、最後は私が教授を務めました。

明治 30: 京都帝国大学設置、東京帝国大学と改称。その後東北、九州、北海道、京城、台北、大阪、名古屋と続く。京城帝大はソウル大学に、台北帝大は国立台湾大学に変わりました。

大正 8: 大学令施行: 分科大学を学部へ改称、併せて、各学部へ大学院研究科を置くこと、学位授与権を大学に、経済学部設置、総長実質選挙制、60 歳定年制導入など始まる。

慶応、早稲田、中央、法政、明治、日本、國學院、同志社の 8 私立大学誕生。

この年の前にも、大学と称する私大がたくさんありました。それは専門学校令による学校でしたが、大学を名乗ることが許されていました。大学令が出てからは、大学として設置認可を受けた学校だけが、大学と名乗れるようになりました。大正 7 年に新渡戸稲造が初代学長になって設立された東京女子大学は、専門学校令による大学として継続し、新制大学の発足と共に大学として設置認可を受けたほんとの大学に変わりました。面白い例です。

戦争の時代が続き、敗戦ですべてが大きく変わります。

昭和 22: 東京大学に改称。

昭和 24: 学制が旧制から新制に変わり新制大学発足。

工学系定員倍増、機械系は S38 に機械、産業機械、船用機械の 3 学科態勢に入る。

その後、船用機械が機械情報工学科に、10 年ほど前に機械と産業機械が合体して現在は機械と機械情報の 2 学科態勢。

平成 3: 工学士の称号が、学位の学士(工学)変わる。博士、修士も表記変更。

PhD in Engineering に合わせ 博士(工学)、括弧内の専門は情報、環境など多様に。

平成 4: 大学院重点化の一環として工学系研究科の部局化、講座制の廃止。

平成 15: 国立大学の国立大学法人化。

説明し始めるときりがないので、この辺で打ち切ります。東大は、日々変わり続けています。では、最後のスライドになります。

終わりに

- 東大工学部は、日本の工学教育の理工二つのルーツが合体し、以来136年にわたって発展してきました。
- 我々は、工学教育の源流を引き継いでいます。我々には、常に先に進み、見本を示し、全体を引き上げる責任があります。
- 今日のセミナーで、その気持ちを再確認して頂ければ、嬉しい限りです。

Thank you very much!

ご静聴、有難うございました。

この後、オンライン参加者を含め、ディスカッションに移りました。司会の酒井信介名誉教授から、何か追加することはないかと勧められたので、次のスライドをお見せしました。

調査の中で、多くの明治の青年像に巡り合い、尊敬と感謝の念を深くしました。私の先輩達に対する思いを纏めてみました。ご同感いただければ、嬉しい限りです。

明治の先輩たちに

- 明治維新後、欧米の列強に並ぶ強国になろうと国を挙げて燃え上がりました。その時期に生を受け、自らの青春を工業の発展に重ねて果敢に挑んだ先輩たちに敬意を表します。
- 高等教育とは何か、大学を出るとどんな将来が開けるか、まだ混沌として何も分からなかった時代に、率先してその道に踏みこんだ勇氣と決断に敬意を表します。
- 当時の日本は、士族、平民の別を始めとして、位階、勲位、官位、学位、爵位など多重の階級が厳存する社会でした。それらの中で、'坂の上の雲'を見つめながら前に進み続けた先輩たちに敬意を表します。
- 誕生した学士をどう扱っていいか、社会は迷いました。工部大学校の先輩は、工部8等技手の底辺からスターとして、実績で責任と地位を高めてゆきました。学士の能力が広く認知され、帝大出というだけで優位な出発点が保障されるようになったのは、明治40年頃からといわれています。我々後輩は、明治の先輩たちが築き上げたプレミアムを享受しています。心から謝意を表します。

- End -

注記:オリジナルの講演に、一部省略のほか、多くの加筆訂正があります。

お問い合わせは pga02322@nifty.com まで。